

緑丘



社団法人 緑丘会

緑丘 (第七四号)

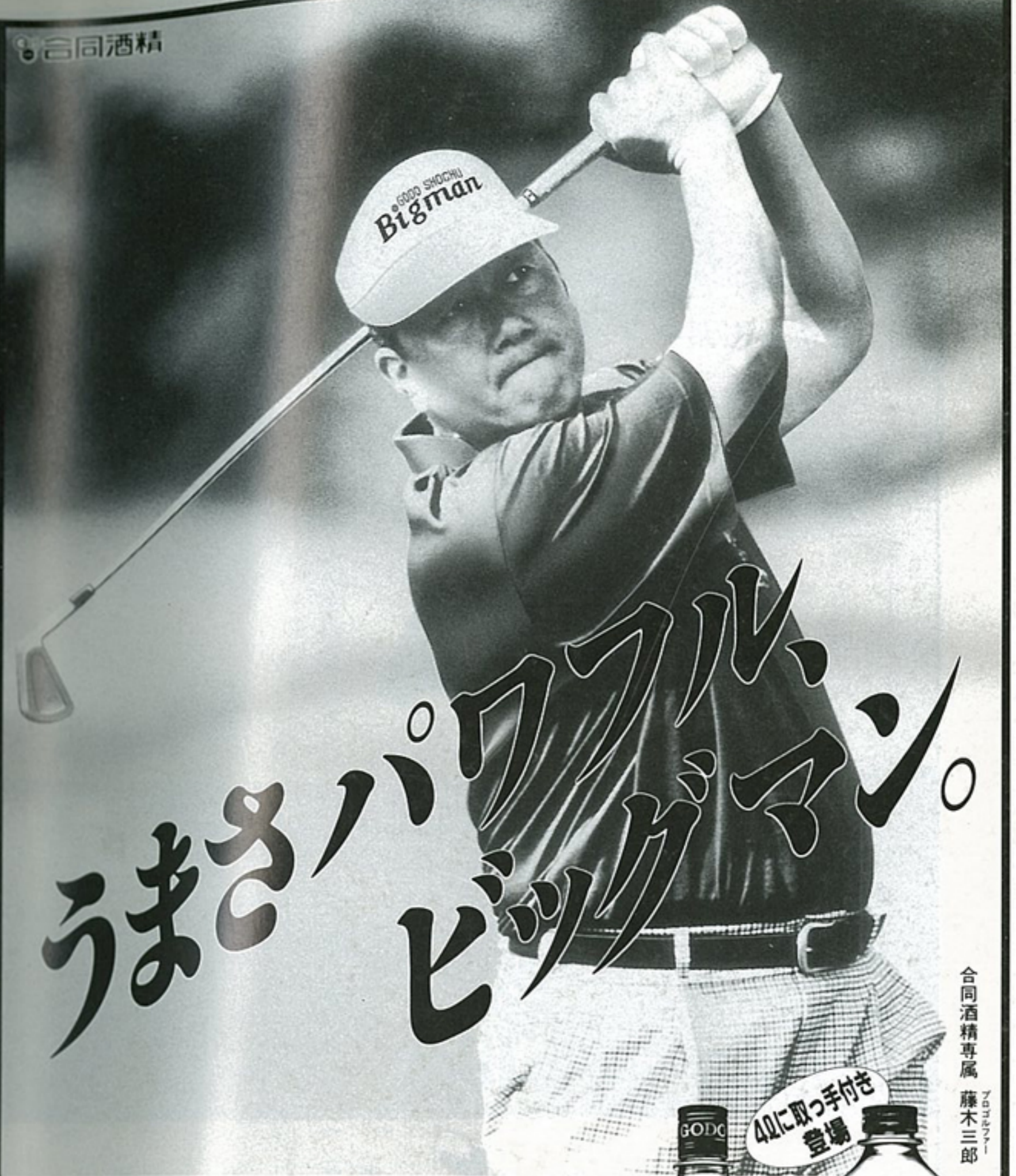
平成五年八月二十五日

緑丘会東京事務所

〒170 東京都豊島区東池袋三二一ー一サンシャイン60(57階)
電話 〇三(三九八一)ー二三四〇

社団法人 緑丘会

合同酒精



うまさパワフル ビッグマン。

合同酒精専属 藤木三郎

ビッグなうまさに乾杯！ ゴードーの焼酎
ビッグマン。技とうまさが光ります。オンザ
ロック、ストレート、お湯割り、お好きな飲み方
でどうぞ。うまさたっぷりのビッグマンです。

GODO ビッグマン

ゴードーの焼酎

飲酒は20歳を過ぎてから



吉野会常会回 緑丘

第54回通常総会報告	2
●学園は今	
小樽商大の現状と直面する課題	山田 家正 … 24
実のある大学を	櫻井 清治 … 27
小樽商大復権の時来たる	竹村 保昭 … 33
一風 袋	奥泉 裕史 … 37
●特別寄稿	
フランスの土木エンジニアの経済思想	
—小樽商科大学後援会助成金へのお礼に代えて—	栗田 啓子 … 39
●ビジネス最前線	
転職商社マンの商品開発奮闘記	十川 忠知 … 41
●エバーグリーン講座 ボランティア講師募集!	青木 雅明 … 50
●事務局便り	52
●随想・手記・短歌・俳句	
学識の丘・恩師の筆のあと	神部健之助 … 59
マダム・マチルド・オオグロ	鎌倉 啓三 … 61
リチャード・ストーリー先生の思い出	林 利宗 … 64
ロビズ、マノイレスコそしてモンテスキュー	
—手塚先生の思い出の中で—	田脇 由夫 … 67
花と植物を通じての国際交流	大崎 康市 … 73
俳句(作句、鑑賞)10のチェック(二)	松橋 玄光 … 77
海外旅行日記と50の手習	高木 晃一 … 84
句苑緑丘〔24〕	91
●手塚寿郎先生の五十年祭行われる	93
●追悼	107
物故会員	114
緑丘往来	115
学園だより	119
支部だより	124
同期会だより	128
緑の紙風船	129
会館利用日誌	131
会員異動通知	135
編集後記	167

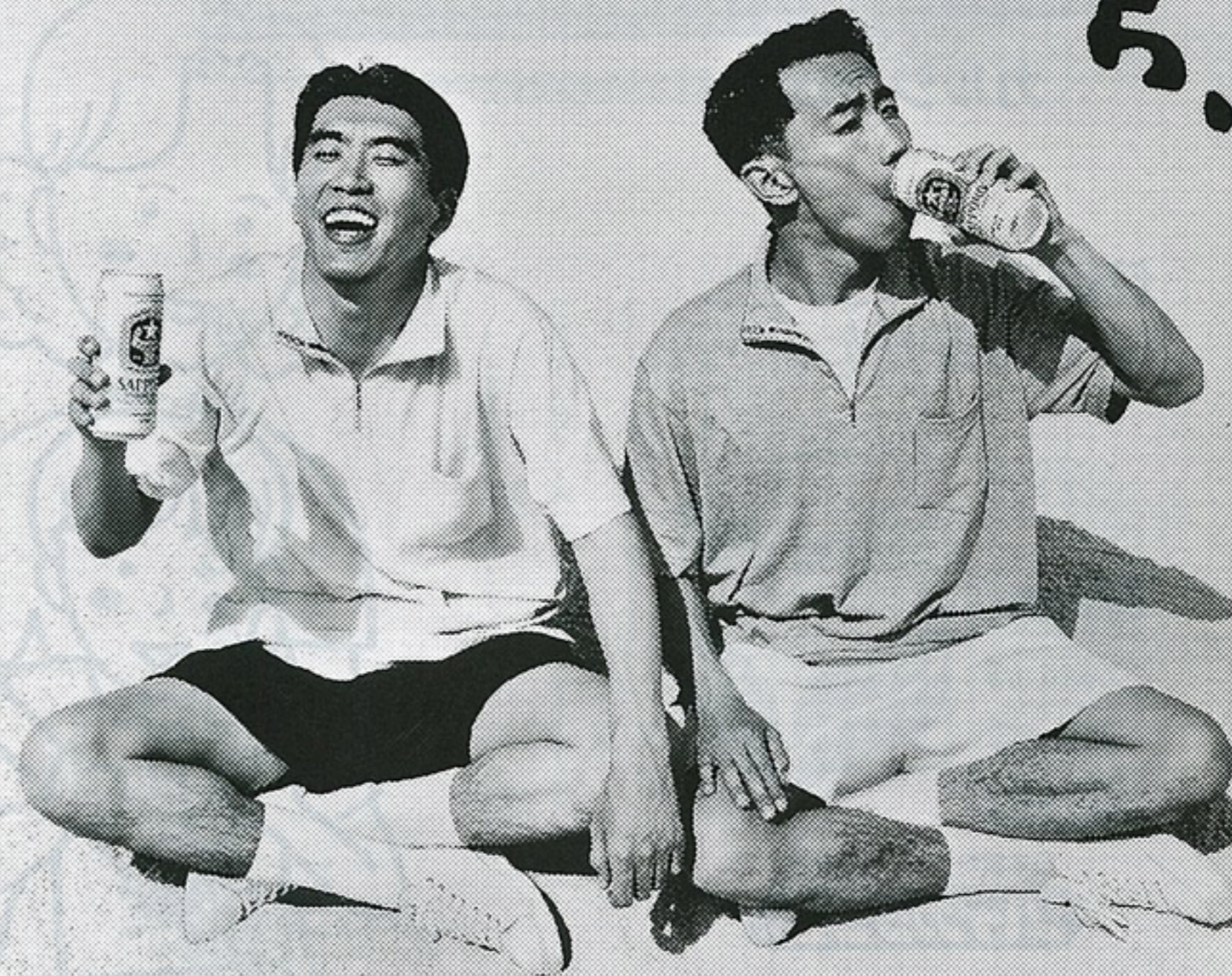
表紙画 尾形圭介(昭34卒)



結局飲んで、黒ラベル。
サッポロ〈黒〉黒ラベル

夏合宿の後輩たちへ。夏合宿は、キツイ。ハードだ。それは基本を鍛えるからだ。小手先のワザじゃない。まるで黒ラベルのように、素材そのものの質を磨くからだ。後輩たち、ツライだろうが頑張れ。汗かけ。オレ達は、キミ達が、黒ラベルみたいにな、バランスのとれた、大人のプレーヤーになるのを待っている。なんて、口には出さないけど、思ってるわけだよ。

大人になつた。
黒ラベル。



ご協力お願い: 自動販売機による酒類の販売は、午後11時から午前5時まで停止されています

●ビールは、20歳になってから ●あきかんはリサイクルへ



文面は次の通りである。

「これが一番評判の良い芝居なんです。宛名は、小樽緑町三ノ八、武田英一氏夫人座下とある。前日には、大西先生は新富座を見物している。先生の夫人みほ子さんから武田榎子夫人宛の新富座・羽左衛門の絵はがきには

「東京は昼たいへん暖かでございます。たが夜はやはり寒うございます。今新富座にまいって居ります。大西は盛大に羽左衛門は美男子だと申して居ります

十二月十九日

先生は次に参照として掲載した評のとおりに羽左衛門と勘彌をよく観察していられる芝居通であった。

(参照) 勘彌の途と源之助の途と

9・2・2 大正日々紙

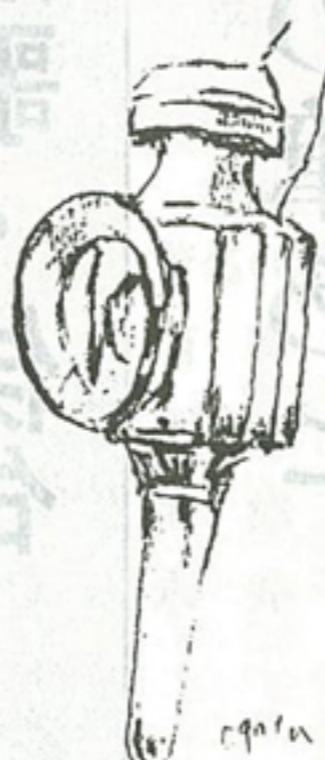
東京へ出て芝居を見る度に感ずるのだが……十二月の新富座は羽左衛門の「直行」と梅幸の「三千歳に配するに松助の

アンマ、丈賀を以てしたが為に多数劇通として……之に恍惚たらしめ得たのではないか。

由來時勢は眞に有為の人材を無意味に葬り去る程の余裕を決して持つては居ない。

古くは梅幸、カブキに在っては久しく歌右衛門の下風に立っていた彼は、帝劇の創設と共に其首幹として新天地の覇権を掌握し得たではないか。

近くは勘彌、彼が最近帝劇に占むる地位役割は、疑もなく木挽町に於ける羽左衛門の夫れに相当するのではないか。



マダム・マチルド・オオグロ



王昭和六年(一九三一)十月、開学以来初めて緑丘の教壇に女性が立った。しかもフランス女性、フランス語の講師として、第二学年と第三学年のクラスに週一回出講したマダム・マチルド・オオグロ、太黒マチルド先生である。先生はそれ以来第二次大戦終了の年昭和二十年(一九四五)十一月迄、フランス語の学生からはもとより一般の学生からもマチ

ルド先生と親しまれ慕われて、札幌の御自宅から汽車で小樽駅に通い地獄坂をのぼられた。終戦の年一旦講師の職を辞し、一時期アメリカ軍政部CIEの通訳をつとめられたが、昭和二十七年五月から昭和三十六年三月迄緑丘にもどり再び教壇に立たれた。従って通算二十三年間の長きにわたって緑丘に通い小樽の町に親しまれたのである。

先生は明治三十五年(一九〇二)二月十三日フランス・ブルターニュに生まれ、その後パリに移り、ソルボンヌ近くのホテル「セレクト」の娘として育った。島崎藤村も滞在したホテルだ。大正十年文部省留学生としてパリ、パスツール研究所に通っていた太黒薫さんと結婚、翌大正十一年夫君と共に札幌に移り住んだ。太黒薫さんは明治二十四年広島県瀬

鎌倉 啓三 (昭15年卒)

戸田町に生まれ、第一高等学校を経て大正元年東京帝国大学医科大学に入学、六年卒業、七年欧米留学、十一年帰朝後北海道帝国大学医学部教授となった。昭和八年退官、九年太黒病院を開業し昭和四十七年逝去した。昭和十二年四月入学した私は第二外国語としてフランス語を選び「フランス語の第二外語の授業は第二学期からで、本来は松尾正路先生が担当されたが、松尾先生がパリ留学中のため、我々のクラスは最初からオオグロ先生が受持たれた。その第一回は教室に溢れるほどの学生で満員、大変驚いたが、第二回目からはフランス語選択の学生のみになった。この現象は例年のことらしく、オオグロ先生を一度見ようと集まるので、先生はい

はばスター扱いであった。教室で初めてお目にかかった先生は、かなり長身ですらりとし、眼鏡をかけ、彫りの深い理知的なマスク、プロンドの髪を無造作にたばね、極めて地味な装い、ハイヒールの脚線美が印象的であった。美しいお声で「ア・ベーサー」からフランス語の授業が始まり、それ以来昭和十五年三月卒業迄毎週一時間先生からフランス語を習う楽しみが続いた。クラスではテキストを使って授業を進められたが、このテキストはフランスから取りよせられたものであった。授業中例の「マンドン・マンドン」と先生に漫談や歌を強要したが、まれに先生はシャンソンを歌って下さった。

私はひたすらフランス語に熱中していた。特にフランス語で話す機会は一週間に一度先生にお会いした時以外にはないので、授業が終ったあとの教室で、或いは教官室への廊下で、あつかましくも先生をひきとめて、片言のフランス語で出来るだけ話をしようと試みた。また

休みの日には札幌のお宅に度々お邪魔した。北大の南門近くの大きな洋館に住んでおられたが、長女の和子さんは女学校の三年生か四年生、先生がフランス語で話す日本語で返事をしていたのが興味深かった。先生はフランス語、日本語の他に英語もドイツ語も母国語と同様に不自由なく使われた。

当時札幌に初めて丸善の支店が出来、ここでは数少ないがフランス語の原書がおりてあり、小樽の本屋にはフランス語の本はなかった。札幌へ行って丸善へ寄るのが楽しみであった。私はその頃先生にお願ひしてパリから直接本を取り寄せていただいた。アンドレ・ジイド「ソヴェト紀行」「ソヴェト紀行修正」「Andre Gide:Retour de L'URSS」「Retouches a mon retour de L'URSS」マルタン・デュ・ガール「チボー家の人々・一九一四年の夏」「Roger Martin du Gard:Les Tribault, l'été 1914」スタンダール「赤と黒」「Stendhal:Le Rouge et Le Noir」プロスペ・メリメ「カルメン」、「Prosper

Mérimé: Carmen」、アンリ・ベルグソン「道徳と宗教の二源泉」Anri Bergson: Les deux Sources de la morale et de la religion」等々。書棚に残っているこれらの本を開くと、五十年以上も昔、先生から手渡されて我が家に持ち帰り、ペーパーナイフで頁を切っていく時の嬉しさがいまでもありありとよみがえる。札幌一中出身の旧友が語っていた。大正の末から昭和の初め、太黒薫さんとマチルドさんが仲よく二人で、ライラックの薫る札幌の広い街並を、馬車でゆく姿を覚えていた。当時札幌の人々は羨望の眼差しでこのカップルを眺めていたと。

先生が私に話されたことがある。結婚し日本に来て初めて御主人の郷里瀬戸内海の瀬戸田島へ渡った。島の人々が外国人を見るのは初めてとか、島じゅう大変なさわざですっかり驚いてしまったと。我々の在学時代は日中事変が始まり、戦争へと国をあげて走り出し、防諜、機密保持、スパイ警戒等々日まじに戦時色が濃くなっていった頃である。外国人を

見ればスパイ視する風潮の中で、先生も度々不愉快な目にあわれたようだ。ある年のクリスマス、深夜のミサから帰宅の途中警官によびとめられ、交番で長い間ひきとめられたといかにも不快げに漏らされたこともあった。弁護士上田誠吉著「ある北大生の受難」の中に、先生のエピソードがのっている。ある時バスの中で二人の男性が太黒マチルド夫人を見て『スパイじゃなからうか』と云った。マチルドはくりりと振りむきざま笑いながら云った『私はスパイじゃありません、アマイです』いかにもパリッ子の先生らしい軽妙な皮肉いっばいの応答ではなかったらうか、そしてせいっぱいの抵抗であつたらう。

先生のお名前をオオグロ・マチルド或はマチルド・オオグロと片仮名で書いてあるが、これには次のようないきさつがある。昭和六年先生を高商の教壇に迎えたとき、非常勤講師の肩書、当時の日本人の非常勤講師の手当はわずかで先生も国籍は日本となっていたため、その手当

は気の毒なくらいであった。苦米地先生や松尾先生が知恵をしぼって「オオグロ・マチルド」と文部省に外人登録し、手当の増額を図ったという。昭和二十一年十二月私は小樽で結婚式をあげたが、その時先生は雪の中をわざわざ札幌から御出席下さった。記念の署名簿に「Jeunes époux soyez heureux Mathilde Oguro」と書かれた筆蹟がいまだに鮮かである。

昭和五十年九月半ば秋高い北海道、小樽で開かれた卒業三十五周年記念クラス会に出席、両親の墓参を終えた私は、オオグロ先生が入院中ときいて早速札幌に赴いた。北大病院の一室に先生は横臥しておられた。それ程面やつれもされておらず、私がお見舞を申し上げると両眼に涙をうかべうなずかれ、しばしお話を交わした。思えばこれが先生にお目にかかった最後となった。この年の十一月十三日、癌性腹膜炎のため七十三才で帰天、札幌郊外のカトリック墓地に眠っておられる。当時の北海道新聞は次のように報じ

ている。「二十才の時に来日して札幌在住五十年、道産子パリジエンヌがマチルドさんの人柄をしのび教え子友人ら三百人が参列してミサと告別式が行われた。弔辞は一切なく故人の人柄を皆さんで思い出し、心の中で弔辞を述べて下さいと司会者。五分間オルガンの音だけが響く」。母国フランスを遠く離れた極東の北の札幌に住むこと五十三年、「私は道産子よ」が口ぐせであったという先生の全く日本にとけこんだ御生涯をしのびながら、緑丘のフランス語の教室で、うるわしい語り口で授業を進められた先生のシツクなお姿を今も鮮烈に思い浮べている。

林

